

ソーク研究所留学記



吉原 栄治

Eiji Yoshihara

Staff Scientist, Gene Expression Laboratory-Ron Evans Lab,
The Salk Institute for Biological Studies

はじめに

私は2011年10月から米国サンディエゴのソーク研究所のRon Evans教授の下でポスドクとして留学し、また2016年11月から同研究所のstaff scientistとして糖尿病の基礎研究に従事しています。ソーク研究所はポリオワクチンの開発によってノーベル賞を受賞したJonas Salk博士が1963年に設立した研究所で、現在、生命医学の分野で世界トップの研究所の1つとして知られています。Ron Evans研究室(Evans研)は1980年代より核内受容体のクローニングおよびその分子、生理機構の解明をリードしている研究室です。現在も国籍や研究背景の異なる20人を超えるポスドクと15名程度のテクニシャンおよび数名のstaff scientistが精力的に、脂肪、肝臓、筋肉、腸および膵臓の各臓器またそれらの臓器間の相互作用について最先端の技術を用いて活発的に研究を展開しており、日夜新しい発見に満ち溢れています。私が留学を意識したきっかけは米国の最先端の研究を学びたいと思ったのと同時に、英語を用いて様々な国の研究者との研究討論能力を身に着けたいと思ったことです。Evans研には私が博士3年の時にご縁がありインタビューに行かせていただきました。アメリカでのポスドクインタビューはほぼ1日ばかりで行われ、1時間ほどの自

身のセミナーに加えて、他のポスドクとの個別の面談、また昼食、夕食をともにすることで、研究室に迎え入れるにふさわしい人間性であるかも採否の考慮にされます。初めてのアメリカでのインタビューでは慣れない英語での討論や日常会話でものすごく疲労しましたが、とてもいい経験になりました。

ソーク研究所での研究生活

研究室では週に1回ポスドクが2人ずつ研究の進展状況に関して発表するラボミーティングの機会があります。ポスドクにとって研究室での発表の機会は、自分の研究を他のポスドクやボスに理解してもらう重要な機会であり、その準備には余念がありません。Evans研では多様なバックグラウンドを持つ20人のポスドクが質疑に参加し、建設的ながらも時には辛辣な批判や研究の方向転換を迫られるような厳しい意見も飛び交います。ラボミーティングに加えて、小規模でのグループミーティングも頻繁にあり、また普段から研究者同士の討論がお茶部屋から細胞培養室、マウス小屋などのいたるところで行われ、最新情報の交換や、実験技術の教え合いが昼夜を問わず行われています。アメリカの研究室では人づての情報交換のスピードが異常に早く、より多くの人とコミュニケーションを取って重要な情報を集めていくという能力が非常